祭礼の傘鉾・風流傘３
―九州各地の神幸に伴う傘鉾―

段　上　達　雄

【要　　旨】

福岡県豊前市から大分県中津市にかけて分布する太鼓舁山型傘鉾の地域性とその形態の特徴を明らかにすると共に、豊後の傘鉾、天草の大矢野上八幡神社の傘鉾、北九州市の天疫神社の花傘鉾、南大隅町の御崎祭りのお傘、太宰府天満宮神幸式のおひれ傘、筥崎宮の大傘など、地域色にあふれた九州の神幸行事の傘鉾を見てゆく。

【キーワード】

傘鉾・花傘鉾・お傘・おひれ傘・太鼓舁山型傘鉾

【はじめに】

「祭礼の傘鉾・風流傘１」と「祭礼の傘鉾・風流傘２」において、九州の都市祭礼での傘鉾と風流傘とを取り上げて考察することができた。本論では農山漁村における祭礼の傘鉾と風流傘の形態や偏在する分布、その祭礼における位置づけについて考えていきたい。

（１）豊前系太鼓舁山型傘鉾

旧豊前国は九州の北東部に位置して周防灘に面し、東南部は大分県、西北部は福岡県に属している。この地域には福岡県豊前市から吉富町や上毛町、それに大分県中津市という、かなり限定的な地域に独特な傘鉾が分布する。その傘鉾は、丈が高くて四角い基台に鋲打ち太鼓を横ざまに据え付け、基台上部前後に舁き棒１本を通し、その上に大きな和傘を立てるという特徴ある傘鉾である。ここでは、この形式の傘鉾を「豊前系太鼓舁山型傘鉾」と呼ぶことにする。また、この地域は踊り舞台を前方に持つ四輪の踊り屋台が重なるように広く分布する。その棲み分けを概観すると踊り屋台は町部に、太鼓舁山型傘鉾は農山漁村に分布すると言っても過言ではない。なお、鶴市神社の花傘鉾は傘上から紙製の造花をつけた多数の割り竹を垂らすが、これは1960年代に工夫されたもので、華やかではあ

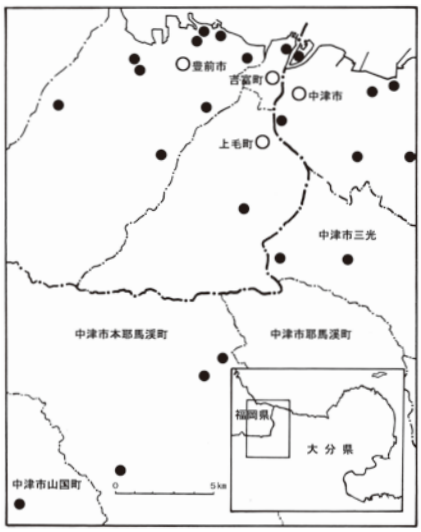

図１ 豊前系太鼓舁山型傘鉾の分布

るが、本来見せるべきものであった傘周縁部の水引幕などが見えにくくなり、太鼓も打ちづらくなっているのが問題である。ただ、その見栄えの良さにより、多くの太鼓舁山型傘鉾はこの花傘を取り入れている。昔の姿を伝えているのは八幡古表神社の傘鉾など数少ない。傘上に御幣を立てる点では依り代としての性格を持っているが、主に町標として機能している。

表１：豊前型太鼓舁山型傘鉾の出る祭礼一覧

所在地		神社名	祭礼行事名	開催期日	傘鉾
福岡県	築上郡吉富町小犬丸	八幡古表神社	大祭（神幸祭）	８月初旬	10基
	豊前市四郎丸	大富神社	八屋祇園（神幸祭）	４月30日～１日	３基
	豊前市宇島	宇島神社	宇島祇園	５月３日～５日	１基
	豊前市中村	角田八幡神社	春季神幸祭	５月20日～21日	２基
	豊前市大内	嘯吹八幡神社	清原神事	４月第２土･日	３基
	豊前市赤熊	足切神社	春季神幸祭	４月15日（16日）	１基
	豊前市畑	水神社	春季神幸祭	４月第４日曜日	１基
	豊前市久路土	石清水八幡神社	春季神幸祭	５月３日	３基
	豊前市沓川	沓川神社	沓川祇園	５月５日～６日	４基
	豊前市鳥越	須佐（鳥越）神社	八朔の節句祭	９月３日	１基
	豊前市三毛門	春日神社	春季神幸祭（三毛門祇園）	４月第４日曜日	１基
	築上郡上毛町東上	八社神社	神幸祭（３年に１度）	５月13日	７基
大分県	中津市相原	鶴市八幡神社	仲秋大祭（かさぼこ祭）	８月最終土･日	19基
	中津市三光田口	箭山神社	箭山神幸（秋季大祭）	10月第１土･日	２基
	中津市三光白木	斧立八幡神社	神幸祭	10月第１日曜日	４基
	中津市大新田	白鬚神社	秋季大祭（大名行列隔年）	９月17日～18日頃	１基
	中津市山国町平小野	菅原神社	秋季祭礼	９月14日～15日	１基
	中津市犬丸	犬丸天満宮	御神幸祭	10月第２土･日	１基
	中津市田尻	加茂神社	秋季例祭	10月第２土･日	１基
	中津市今津	恵比寿神社	恵比寿祭り	10月第１土･日	７基
	中津市耶馬溪町平田	城井八幡神社	河降り神事（水神祭）	９月30日	１基
	中津市角木	闇無浜神社	中津祇園	７月最終土･日	１基
	中津市大貞	薦神社	仲秋祭	９月第３土･日	４基
	中津市小祝	小祝神社	秋季大祭	10月第２土･日	３基
	中津市耶馬溪町平田	皇祖神社	祭礼	８月下旬不定期	１基
25社					84基

※城井八幡神社の河降り神事（水神祭）の傘鉾は元は５基
※小祝神社の秋季大祭の神幸の傘鉾は元は４基

①八幡古表神社の仲秋祭

福岡県築上郡吉富町小犬丸の八幡古表神社では４年に１度、８月初旬の午前中に潮が満ちる日に「傀儡子の舞と相撲」（仲秋祭）を行っている。

当日の午前７時、境内の恵比須社の前でまず祓式を行う。修祓を受ける順は、最初は各船の船長、２番目は招待参列者と一般参列者、３番目は各区ごとにお祓いを受ける。修祓の順は、昭和地区、小犬丸上地区、小犬丸下地区、喜連川上地区、喜連川下地区、高浜地区、広津上地区、広津下地区、それに皇后石地区となっている。お祓いを受けた区から順に、総代を先頭に世話役・傘鉾太鼓･お囃子方･お供人の順に行列を組み、お囃子を奏でながら、東参道の放生会鳥居を通っ

P01 八幡古表神社の傘鉾（喜連川）

P02 八幡古表神社神幸行列の傘鉾

て神社前の川原から乗船する。修祓の４番目は船奉行と漁村地区の総代と漁協関係者、５番目は指揮船関係者（世話役の総代２人と漁協関係者）、６番目は細男舞・神相撲保存会員、７番目は神職３名（宮司･禰宜･権禰宜）、８番目は巫女８名、９番目は氏子総代（各区から１名）である。御座船には神職と巫女、それに各区の総代が乗船する。乗船の済んだ船から離岸し、山国川橋下に一旦集合し、川下に向かって北上して本川筋との分岐点で船の隊列を組み直す。煙火の合図でお囃子をやめ、御座船で祭典を始める。修祓、祝詞奏上を行い、大麻の儀で神籬･放生物（蜷貝･魚介類）、各船と参列者を祓い清める。放生会の祝詞奏上を終えると、一同拝礼する。煙火の合図で船団はゆっくりと北上を開始し、お囃子を再開する。御座船では大祝詞奏上の後、蜷貝を手にとって海に放生する。それと同時に神相撲船では細男伎楽を奏す。神相撲船の船上は四角い幕を張った舞台となっており、「傀儡子の舞」を行う。東西南北に１体ずつ神々（傀儡子）が登場して舞を演じる。続いて、東に男神、西に女神が１体ずつ登場して御神歌を奏し、次に東西に２体ずつ、南北に１体ずつ計６体の神々が登場して御舞を演じる。この傀儡子の舞の間に、船団は山国川河口から北上して陸から一里（約４㎞）の周防灘海上に達しており、福岡県と大分県との県境付近で円陣となる。御座船を中心に右手に神相撲船、左手に奉行船と並び、その周囲を各地区の太鼓船とお供船が取り囲む。煙火の合図でお囃子をやめ、「陸海産業増進満足大祈願祭」の祭典を始める。続いて「神相撲」を行う。東西南北の４面に各２柱ずつの神々が登場して相撲をとる。次いで船首側の北面で東西の御主神である祇園大神と住吉大神の相撲となり、大一番となるが、住吉大神の勝ちとなる。続いて、２体ずつの女神が登場して八乙女の舞を行い、細男伎楽と神相撲を終了する。次に御座船で八乙女（巫女４名）が浦安の舞を演じ、献餅の儀を行う。８月から始めて１年12ヶ月の守護神たちにそれぞれ紅白一重ねずつの餅を献じ、海に向かって投げ込む。ぎっしり詰まった船団なので、餅の多くが船の中に飛び込み、人々は争って餅を受け取ろうとする。続いて、放魚の儀があり、船の生け簀からすくい上げた魚、カニ、エビ、貝類を海に放生する。次に斎主（宮司）に合わせて船団の人々全員で柏手拝礼する。煙火の合図で先導船に従って、海苔ヒビを祓いながら帰港する。御座船では、２名の神職が切幣（細かく切った麻と色紙に米と塩を混ぜたもの）を左右左と撒きながら進む。切幣が無くなると、大弊で祓ってゆく。船出した河岸から上陸し、お囃子を奏でながら放生会参道を通って神社に戻る。全員が帰着する

と、社殿前の斎庭で拝礼し、最後に祭典奉行の音頭で三本締めで手締めして、午前中の海上祭は終了する。

午後７時半から拝殿で夜の大祭祭典（乾衣祭）を始める。修祓の儀、開扉、献饌、祝詞奏上を行い、正面の申殿で４名の巫女が浦安の舞を行う。玉串奉奠、一同列拝の後、神職と保存会の人たちが神殿に向かい、宮司が神功皇后像（国重文・騎牛女神像）を捧げ持ち、禰宜が神牛の手綱を持つ妹神の空虚津姫神像を捧持して出てくる。保存会長が皇后像の台座を、４人の保存会員が47体の御神像（傀儡子）の入った唐櫃を持つ。空虚津姫神像、神功皇后像、台、唐櫃、保存会員が渡御行列を組み、権禰宜が祓いながら先導して神舞殿に進む。神舞殿に入ると、空虚津姫神像と神功皇后像は正面奥の座に安置され、御神像は神棚に並べて安置される。宮司が八幡古表神社の縁起と行事の由来を説明し、細男舞と神相撲を行う。まず、東西２体ずつの神々が出て舞い、次いで１体ずつ御神歌があり、最後に３体ずつ舞う。その後に神相撲を行う。東西11体ずつの神々による勝ち抜き相撲で、次に東の５柱の神々と西の住吉大神との飛びかかり相撲となる。最後に東の11体の神々と住吉大神との押し合い相撲となって、住吉大神が勝利する。その後に、東西４体ずつの女神による八乙女舞が行われて終了となる。神殿への還御があり、祝詞奏上、撤饌、閉扉となり、一同礼拝して終了となる。

八幡古表神社の「傀儡子の舞と相撲」での海上祭の太鼓船とは、各地区の傘鉾を搭載した漁船のことである。豊前系太鼓舁山型傘鉾で、昭和地区、小犬丸上地区、小犬丸下地区、喜連川上地区、喜連川下地区、高浜地区、広津上地区、広津下地区、幸子上区、幸子古区から計10基が出る。海上祭では、御座船（漁船２艘を横連結）１組、指揮船（小型快速船）１艘、奉行船１艘、各区の太鼓船と御供船各１艘である。

平成16年と平成20年は仲秋祭の日が豊前市の港祭りと同一の日となり、豊前からの漁船の参加がなくなったために船団を組むことができず、仲秋祭は吉富漁港内で行われた。港岸に供物壇を設け、その先に御座船を停泊させて、傀儡子の舞と神相撲が行われた。御座船も大型の漁船１艘で舞台を作り、その傍らに囃子船を停泊させ、その反対側に少し距離を置いて神楽船が停泊していた。港岸から放生をして、神事も供物台の前で御座船に向かって行われた。

傘鉾本体の高さ2.3ｍ、台車含む全高約2.7ｍ、傘直径約1.4ｍで、大傘の周囲には緋毛氈の幕をぐるりと吊り下げる。花傘が取り付けられおらず、昔ながらの伝統的な傘鉾の姿を保っている。傘鉾の台となる太鼓台は漆塗りで、喜連川上区の傘鉾の場合、太鼓台の高さ150㎝、幅57㎝、長さ72㎝あり、これに長さ252㎝の担ぎ棒１本が貫いている。かつては担いで移動していたが、現在はタイヤ４輪付きの鉄製台車に搭載する。

八幡古表神社の傘鉾の最上部には御幣を立てる。ただ、広津上区だけは分銅型と毛頭を載せている。幕は緋羅紗地に金糸などで刺繍が施されている。喜連川上区は「注連縄・恵比須面と鯛」、喜連川下区は「注連縄」、高浜区は「注連縄･額入文字『高』、幸子上区は「注連縄･波濤と松･山･流鏑馬」、幸子古区は「注連縄･鯉･『古』文字」、小犬丸上区は「注連縄･鯉」、小犬丸下区は「注連縄･鯉」、広津上区は「注連縄･『廣』『上』文字、広津下区は「注連縄･文字『廣』『下』･波千鳥」、昭和区は注連縄･文字『昭』」である。なお、幸子上区の幕には「平成九年八月吉日」の銘がある。

②大富神社の神幸祭

福岡県豊前市大字四郎丸の大富神社では、毎年４月30日から５月１日にかけて神幸祭（八屋祇園）を行う。前日の午前中に踊り車は住吉神幸場（御旅所）で汐かきを済ませ、午後は各町内を廻る。

船車は午後に町内を出立して御旅所で汐かきした後、提灯で飾り付けをする。踊り車は午後３

時頃に御旅所で汐かきした後、夕方に前川橋付近で提灯の飾り付けをして、船車と共に上町の四辻で行き交って見せ場を作る。１日目の30日午前10時半頃、大富神社神前で幣を立てた船形（船神輿）の周囲に唄衆が蹲踞して「船唄」を歌って祭りが始まる。次いで感応楽か神楽（一年交替）を奉納し、「お下り」の神幸行列が八屋の八尋浜の御神幸場（御旅所）に向かって出立する。行列の順は、小舟・舟唄組・祭鉾・大榊・水（汐）桶・幣台・鉾面・社名旗・幣台・茅ノ輪・玉串箱・苗箱・賽銭箱・川内の傘鉾１基・神刀・神馬御幣・神輿・地官・大村の傘鉾１基・神刀・神馬御幣・神輿・地官・鳥越の傘鉾１基・神刀・神馬御幣・神輿・地官・乗馬（宮司）である。途中、船車（大舟・１～２基）が上町の三叉路で行列をお迎えし、これに従うように各町内の踊り車（前川・下町・八幡町の３基）と山車（上町・本町の２基）がそれぞれ御旅所を目指す。上町の四辻での行列・船車・踊り車・山鉾の通過順は、昔ながらのしきたり通りに決まっている。御旅所に到着した行列では、神輿の練り込みが行われ、お着きの神事の後に舟唄組が「四季の口説き」を歌い、再び感応楽か神楽が演じられる。夕方には、まず船車が御旅所に到着し、次いで山鉾が駆け込み、踊り車が到着すると、祭りは最高潮に達する。２日目の５月１日は、午前中に御旅所で神事が行われた後、昼頃に、踊り車が前川・下町・八幡町の順で出立する。午後２時から盛り砂にチガヤを18束植えて水をかける「お田植神事」を行い、引き続いて茅ノ輪潜りを行う。午後４時には「お上り」の神幸行列が御旅所を出立して大富神社に向かう。午後４時半には船車が出発して神幸行列と共に進み、前川で分かれて町内に戻る。午後５時半には山車も出立する。神幸行列は７時頃に神社に還御するが、その頃に感応楽がお着きの奉納を行う。大富神社に着いた神輿はそれぞれ境内で練り込みをした後、御神殿に納められる。その頃、八屋の町では山車や踊り車などの祇園車は巡行を続けており、踊り車は新天街の三叉路で競演会を行い、ＪＲ宇島駅まで巡行してから各町内に戻る。

P03 大富神社神幸の傘鉾（鳥越）

それぞれの傘鉾の幕には次のような刺繍が施されている。大村地区の傘鉾の幕は「三階菱と帆掛け船」、鳥越地区は「龍と渦巻き」、川内地区は「龍」である。なお、「三階菱」の紋は、中津藩小笠原家の家紋である。

③宇島神社の宇島祇園

福岡県豊前市大字宇島の宇島神社では、毎年５月３日から５日にかけて宇島祇園（春季神幸祭）を行う。初日の５月３日は花（御祝儀）貰いといって、船車（天祥丸／宝来町）と踊り車（八千代町・千代町・恵比寿町・魚町・神明元町の５基）がそれぞれの町内を練り廻り、商家や有志の家に立ち寄って踊り等を披露しながら宇島神社に集結する。中日の４日は宇島神社での神事が終わると、神幸行列は御旅所である八千代町の堂山神社に向かう。神幸行列の順は、社名旗・高幣・鉾面・神輿・長者町の傘鉾１基・船車・踊り車５基である。各車は巡行しながら注連の立つ場所で踊り等を披露し、小笠原神社で休憩した後、御旅所に入る。５日午後、神幸行列は御旅所を出立して宇島神社に向かう。宇島神社に到着すると、山車はそれぞれ境内に一気に駆け込み、祭りは最高潮に達する。舟唄が歌われ、踊りの競演が行われ、最後に天祥丸の引き上げ音頭を合図に

踊り車は各町内に引き上げて行く。長者町の傘鉾の幕には「三階菱紋」の刺繍と「注連縄」の染めが施されている。

④角田八幡神社の春季神幸祭

福岡県豊前市大字大字中村の角田八幡神社では、毎年５月20日から21日にかけて春季神幸祭を行う。神幸行列の順路は隔年で「東廻り」と「西廻り」とを繰り返す。偶数年は「東廻り」で、初日に角田八幡神社を出立した神幸行列は、馬場の雲見神社・中村の水神・高杉の公園を経て御旅所に到着し、２日目は松江の七社神社・畠中を経由して角田八幡神社に戻る。この年には神楽の奉納がある。奇数年は「東廻り」で御旅所は七社神社となり、豊前楽（楽打ち＝太鼓踊り）を奉納する。神幸行列は太刀２人・鉾２人・旗・中村の傘鉾２基・神輿３基の順で構成される。中村地区の傘鉾の幕は緑地に「龍と虎」の刺繍、もうひとつの傘鉾は雇用促進によって出されており、赤地に龍の刺繍を施す。

⑤嘯吹八幡神社の清原神事

福岡県豊前市大字大内の嘯吹（うそぶき）八幡神社では、毎年４月第２土・日曜日に清原（せいばる）神事を行う。初日の早朝、次官が八尋ケ浜で塩汲みをする。午後３時嘯吹八幡神社を出立したお下りの神幸行列は、初日には山内･大木･為国・中組・四ツ口・合原を経て、清原神事場（御旅所／県道32号線沿い）に到着する。神幸行列が清原神事場に到着すると、入口の二塚神社（祭神は猿田彦命と天鈿女命）で神事を行った後に神事場に入る。神輿を浮殿に納めた後、山内神楽講による豊前神楽の奉納がある次官が御旅所に泊まって神輿を守護する。２日目の午後１時、お立ちの湯立て神楽が奉納された後、お上りの神幸行列は神事場を出立して、合原・四ツ口・中組・為国・大木・山内 を経て、午後８時頃に嘯吹八幡神社に戻る。拝殿では夜遅くまで神楽が奉納される。神幸行列は塩筒（次官）・高幣・鉾面（赤と青の鬼面）・幣台・傘鉾１基と神輿１基・傘鉾１基と神輿１基・傘鉾１基と神輿１基の順である。傘鉾と神輿を担ぐ担当地区は決まっていて、①山内、②大木・為国・中組、③四ツ口・合原の３組に分かれている。神輿の順は山内だけが決まっていて、お下りは１番目、お上りは２番目となる。他の組は年によって違う。下河内地区の傘鉾の幕には「龍と虎」、山内地区は「武者」、四ツ口･合原地区は「富士の巻狩」の刺繍を施す。

P04 嘯吹八幡神社清原神事の傘鉾

⑥足切神社の春季神幸祭

福岡県豊前市大字赤熊の足切神社では、毎年４月15日に春季神幸祭を行う。旧赤熊村内を神幸行列が一巡する祭りで、神幸行列は赤と青の鉾面・社名旗（高幣）・幣台・傘鉾１基・神輿（車台に搭載）･傘鉾１基･神輿（担ぎ）という構成である。２つの傘鉾とも幕に三階菱紋を染め出す。

⑦水神社の畑神幸祭

福岡県豊前市大字畑の水神社では、毎年４月第４日曜日に春季神幸祭（畑神幸祭）を行う。大字畑を一巡する御神幸で、湯出川原の水神社を出立した神幸行列は、山谷の八幡神社・竹ノ下の

塞神社・原井の猛勇神社を経て水神社に戻る。行列は高幣・五色の流し幡（幟）・畑地区の傘鉾１基・御幣（幣台・鉾面）・神輿の順で、神輿と傘鉾は畑上組・中組・下組が毎年交代で担当する。畑地区の傘鉾の幕には三階菱紋と注連縄の刺繍がある。

⑧久路土石清水八幡神社の春季神幸祭

福岡県豊前市大字久路土の石清水八幡神社では、毎年５月３日に春季神幸祭を行う。石清水八幡神社を出立した神幸行列は、弘瀬・高田・東皆毛・小石原・西皆毛・岸井・堀立・梶屋・久路土・鬼木・久路土を経て、石清水八幡神社に戻る。この神幸行列の構成は、先頭から社名旗・鬼木の傘鉾１基・高幣・神輿・宮小路の傘鉾１基・高幣・宮神輿（堀立神輿）・岸井の傘鉾１基・高幣・子供神輿・賽銭箱となっている。鬼木地区、宮小路地区、岸井地区の傘鉾の幕はすべて巴紋の刺繍を施す。

⑨沓川神社の沓川祇園

福岡県豊前市大字沓川の沓川神社では、毎年５月５日に沓川祇園（春季例大祭）を行う。沓川神社を出立した神幸行列は、大分製紙・東芝・豊前マイカーセンターを経て、島田邸前で折り返し、金比羅宮を経て沓川神社に戻る。行列は賽銭箱・高幣・神輿・東組の傘鉾・上組の傘鉾・西組の傘鉾･中組の傘鉾各１基の順である。東組の傘鉾水引幕は白地幕の上部を巡るように注連縄、それに龍と渦巻きと三階菱紋の金糸刺繍を施す。上組の傘鉾水引幕は薄茶地に注連縄を巡らせて三階菱文の刺繍を施す。西組の傘鉾水引幕は、赤地に注連縄、富士山と龍の刺繍を施す。中組の傘鉾水引幕は薄緑地に注連縄と三階菱文の刺繍がある。いずれも太鼓を内蔵した担ぎ台型の傘鉾だが、現在はリヤカーに積載している。

⑩須佐神社の八朔節句祭

福岡県豊前市大字鳥越の須佐神社（鳥越神社）では、毎年９月３日に八朔の節句祭を行う。須佐神社を出立した神幸行列は、大富神社大鳥居・前川・下町・厳島神社・本町の中の四辻・上町・国道10号線の大村入口信号を経て須佐神社に戻る。行列は賽銭箱･旗･傘鉾（現在は基台のみで、傘と幕をつけていない）・神輿の順である。

⑪春日神社の春の神幸祭（三毛門祇園）

福岡県豊前市大字三毛門の春日神社では、毎年４月第４日曜日に春の神幸祭（三毛門祇園）を行う。春日神社を出立した神幸行列は、天神社・ＪＲ三毛門駅の駅前通り・西出屋・クロベタ・新池・東出屋・中出屋・東池・森久・六郎を経て春日神社に戻る。行列は御幣・賽銭箱・三毛門の傘鉾１基、神輿３基の順である。三毛門地区の傘鉾の幕には三階菱紋の刺繍を施している。

⑫八社神社の御神幸祭

福岡県築上郡上毛町東上の八社神社では、３年に一度、５月13日に御神幸祭を行う。若者が神輿を舁き、その後を傘鉾が随伴する。下村・野間・小山田・中村・有田・大地原・岩屋など、集落ごとに傘鉾１基を出す。

⑬鶴市八幡神社の仲秋大祭（かさぼこ祭り・花傘鉾祭り）

大分県中津市大字相原字坂手前の鶴市八幡神社では、毎年８月最終土･日曜日に仲秋大祭（「かの祝詞を奏上の後、午前９時に傘鉾10基が神輿の前供として鶴市神社を出発し、御神幸が始まる。

P05 鶴市八幡神社の花傘鉾

P06 鶴市八幡神社仲秋大祭の傘鉾行列

表２：鶴市八幡神社仲秋大祭の傘鉾

	傘鉾地区	地区の神社	傘鉾大幕の刺繍	製作年代
1	永　添	松尾神社	龍と虎	不明
2	湯　屋	貴船神社	鶴の丸に一文字	
3	相原・三口	貴船神社	甲冑武者	明治か大正期
4	万　田	貴船神社	丸に剣片喰	昭和36年８月
5	南高瀬		富士と鷹	昭和59年３月
6	高　瀬		松と波	昭和59年８月
7	上宮永	貴船神社	龍と渦	昭和 ３年４月
8	下宮永	貴船神社	龍と渦	昭和53年４月
9	金手沖代	鶴一社	諏訪鶴丸と鳥居鶴丸の合わせ変型	平成 ７年
10	島　田	島田神社	十六菊（島田神社神紋）	平成13年
11	中　殿	貴船神社	諏訪鶴丸と鳥居鶴丸の合わせ変型	昭和33年８月
12	宮　夫	貴船神社	近江八景？	平成14年
13	一ツ松	八坂神社	鶴（紋）	昭和30年
14	牛　神	貴船神社	龍と剣片喰	平成14年？
15	蛎　瀬	八坂神社	八坂木瓜（蛎瀬八坂神社の神紋）	昭和25年
16	大　塚	八社神社	浦島太郎	昭和35月２日
17	東　浜	貴船神社	龍と渦	昭和４～５年
18	上池永	若八幡神社	文字「上池永」	大正８年
19	下池永		龍と波	不明

途中、下池永で傘鉾９基が合流し、沖代平野を一巡して夜の10時頃に山国川三口河原の行宮に到着する。第２日の日曜日、午後７時半に山国川の堤防上に傘鉾が整列。行宮祭の後、神輿の川渡りを行い、９時半に神輿は本宮に還御する。

輿丁と神輿直前の傘鉾は湯屋と決まっている。その他の傘鉾の巡行順は毎年くじ引きで決める。巡路は年によって多少変更がある。巡路は大字順に、相原・湯屋・永添・金手・上池永・下池永・東浜・宮夫・一ツ松・牛神・蛎瀬・大塚・中殿・島田・下宮永・上宮永・北高瀬・南高瀬・満田の19の大字を巡幸する。高標は御神幸の巡路と三口河原の行宮前にも立てる。

神幸行列は高幣が先導し、神幸委員、傘鉾、賽銭箱、神輿、宮司と続く、傘鉾は一基毎に太鼓１名、笛２名、チャンガラ２名の楽員が祭囃子を奏する。神輿は要所では担ぐが、ほとんどの場合、リアカーに載せて運ぶ。

傘鉾は太鼓を乗せる基台と大傘からなる。中ほどに担ぎ棒を通して二名で担ぐが、最近は担ぎ

手が不足して台車に載せて曳くようになった。大傘の頂上のろくろに御幣を立て、傘の周囲に赤の羅沙地の水引を回す、水引の中には金糸や銀糸、色糸などで刺繍した豪華ものもある。図案は傘鉾ごとに異なる。傘の周りに大字名の入った小提灯を八挺つるす。傘のろくろに固定した輪に紙の造花をつけた竹ひごを20本ほどつけて垂らす。この造花をつけたヒゴは1960年代に取り付けるようになったという。最近は全ての傘鉾がつけるようになり、華やかな水引の模様が見られなくなった。

『鶴市根元記』によれば、この地は沖代八千石といわれ、よく肥えた土地だったという。しかし、田畑に水を引く三口井堰が、洪水のたびに流され、村人達は大きな被害を受けていた。そこで保延元年（1135）に洪水が起きてもびくともしない「大井手堰」の建設を始めたが、大変な難工事で建設はなかなか進まなかった。地頭の湯屋弾正はこれを見かね、工事完成のため、自ら人柱となる決意を固めた。しかし弾正抜きでは堰の完成はかなうまいと考えた弾正の家臣の娘鶴は、自分が人柱になることを願い出た。一度は申し出を断った弾正も、鶴とその子市太郎の真心に打たれ、遂にこれを許可。人柱に立つその日、二人は神輿に乗り、水の底深く沈んで行った。間もなく大井手堰も完成。堰は満々と水をたたえ、沖代八千石は豊かな実りに恵まれるようになったという。

以後人柱になった鶴と市太郎の霊をなぐさめるためと、その年の豊作を祈願するため、沖代平野の19の大字から傘鉾を出して、ご神幸を行うようになったのだという。

⑭箭山神社の秋季大祭（箭山神幸）

大分県中津市三光大字田口八面山の箭山神社では、毎年10月第１土・日曜日に秋季大祭（箭山神幸）を行う。この箭山神幸に傘鉾が登場する。森山は一の神輿、田口は二の神輿、加来は三のそれぞれ担ぎ、下田口と成恒からは傘鉾各１基出すが、下田口の傘鉾だといって別格である。明治頃まで、西秣と下秣からも傘鉾が各１基出ていたという。

P07 箭山神社秋季大祭の傘鉾

箭山神幸は古くは10月19～20日に執行されていたが、現在は10月の第１土・日曜日に行われる。初日、夜も明けやらぬ深夜、八面山（箭山）山頂に鎮座する箭山神社から、神主が御神体を背負って氏子の先導のもとで麓の仮宮の観音堂まで運ぶ。午後、御下りの神幸行列が出発する。御旅所で千歳楽が演じられる。千歳楽は昭和39年から中断していたが、平成８年に復活した。千歳楽は子供の演じる楽打ち（風流踊りと念仏踊りの系統をひく神事芸能）である。露払いを先頭に、神幸行列は総代長・むら太鼓・傘鉾（成恒）・御神太鼓（下田口）・賽銭箱・神輿（森山・田口・賀来）・神主・御幣の順に進み、森山の御旅所に午後九時頃に到着する。そこで御子神楽を奉納して一夜を過ごす。御旅所には、幟やタカシメ（高注連）が立ち並び、露店もあり、中・高校生による相撲も行われ、神楽も奉納される。翌日、午後８時頃に御子神楽を奉納して観音堂に還幸する

⑮斧立八幡神社の神幸祭

大分県中津市三光大字白木字釿立の斧立八幡神社では、毎年、10月第１日曜日に神幸祭を行う。

当日の朝、八幡神社で神事の後、御輿の巡幸がある。旧真坂村の大字臼木、佐知、小袋から各１基、土田２基の計５基の傘鉾が御輿のお供をして、八幡神社を朝出発し、前記四字と諫山の集落を巡幸して、夜10時過ぎ八幡神社に還御する。昔は旧山口村大字諫山からも山傘鉾が出ていた。この５集落の水田は貞享三年（1686）10月に完成した荒順井路によって潅漑されている。行列の順序は、露払いの御幣･傘鉾･賽銭箱･御輿･最後に宮司（昔は乗馬）が車に乗って鎮めて行く。御輿の前の傘鉾を御神太鼓といって、これは氏子である臼木の傘鉾と決まっている。また、御輿は臼木の氏子が担ぐ。昭和20年代までは毎年９月７～８日の２日間であったが、現在は１日だけとなった。２日間の時には、臼木の貴船宮と佐知の川原（佐知の七所神社に着御して川原に設けたお旅所に一泊）を隔年毎にお旅所としてた。今は隔年毎に上記貴船宮と佐知七所神社をお旅所とし、宿泊せずに２～３時間の休憩で還幸する。斧立八幡神社は神亀二年（725）の宇佐神宮の神殿創建の時、この地で杣始めの式を行い、宇佐神宮一の殿に祀る八幡大神と同体の神を鎮座したのが始めといい、このことから斧立八幡社と通称するようになったという。

⑯白髭神社の大名行列

大分県中津市大新田の白髭神社では、２年に１度、秋の大祭の時に神幸が行われる。この神幸は大名行列に準じて行われる。本来、大祭は９月17～18日だったが、現在はそれに近い土、日曜日にかけて実施されることも多い。午後４時に参加者は神社に集合し、本殿での祭典の後、５時に神社を出立し、大新田地区内を西、そして東に練り歩き、10時頃に神社に戻る。行列の一番先頭を侍姿の「先払い」が「下にぃ下に」と大声をかけながら進む。次に２人の足軽姿の「挟み箱」が挟み箱を担いで進む。続いて20人ほどの子どもたちの「弓隊」「鉄砲隊」「槍隊」が進む。そして「長持ち」が続く。「音頭取り」は出立時にはお立ち唄、道中では道中唄を歌い、長持唄を歌うのに合わせ、三人の長持ちが面白おかしく踊りながら進む。次に「しゃぐま（毛槍）」が続く。前２人後ろ２人の４人一組で、後ろの２人は毛槍をぐるぐる回しながら進み、しばらくすると、毛槍を投げ、前の２人が受け取って前後が交替する。続いて傘鉾１基が進み、最後に「神輿」と「子供神輿」が進む。白髭神社は疱瘡除けの神として信仰され、近世では秋の大祭の時に中津藩の藩主が参拝したという。明治４年（1871）の廃藩置県の時に、中津藩主奥平昌邁は東京に移住することになり、その時に不要になった大名行列の道具を白髭神社に奉納し、それ以来、大名行列が神輿の先導をするようになった。

P08 白髭神社の傘鉾

⑱犬丸天満宮の御神幸祭

大分県中津市犬丸の犬丸天満宮の御神幸祭は、10月の第２土～日曜日に行われる。初日の午後６時、花火を合図に天満宮を神幸の大名行列が出発し、約１キロメートル離れた仮宮まで練り歩く。稚児を先頭に、毛槍・傘鉾、神輿などが続く。

⑲加茂神社の大名行列

大分県中津市田尻の加茂神社秋季例祭が10月第２土曜日と日曜日に行われる。この神幸も大名行列で、神輿の前を１基の傘鉾が進む。

⑳今津の恵比寿祭

大分県中津市大字今津の恵比寿神社では、毎年10月第１土・日曜日に恵比寿祭りが行われる。本宮から仮宮に神輿１基が渡御するが、神輿の先を七台の傘鉾が随行する。カラオケ大会や小・中学生による相撲大会が行われる。

㉑城井八幡社の水神祭（川降行事）と例祭

大分県中津市耶馬渓町大字平田字宮ノ馬場の城井八幡社では、９月30日に水神祭、翌日の10月１日に例祭を行う。水神祭は昭和11年（1936）から始めた「川降行事」で、10月10日だったが、現在は例祭前日の９月30日に清祓として執行される。神官は午前10時に参進して神輿を組み立てる。高幣・塩振り・傘鉾・宮司・神輿の順で２ケ所のタカシメ（高標）を通って、神輿を社前の山国川の祓所に遷す。宮司がオオヌサ（大幣）で神輿と神職を祓い、かわらけに汲んだ川水に塩を入れ、榊を浸して祓う。神輿を申し殿に安置して神官祭りを行う。正午から社務所で神官座を催す。床の間に「若八幡宮」の軸を掛け、神酒・熟饌を供えて直会をする。10月１日の例祭の御神幸は平田、戸原、尾友田・三尾母・福土の三地区が交代でお世話するので、その年の世話地区を巡る。神幸行列は高幣・塩振り・神輿・傘鉾・宮司・傘鉾・囃子・お伴（氏子総代・神官・氏子）の順である。傘鉾は八幡社・平田・多志田・冠石野・口ノ林の５基だったが、昭和30年代から担ぎ手不足のため、現在八幡社の傘鉾１基だけとなり、リアカーに載せて運んでいる。囃子の笛・太鼓・チャンガラ各１名は戸原神楽の楽員である。

（２）天疫神社の花傘鉾

福岡県北九州市門司区吉志の天疫神社では、毎年４月26日に「吉志の二十六夜」という神幸祭を行い、神輿に花傘鉾を随行させる。この吉志の二十六夜は地元では「ろくや」と呼ばれて親しまれている。地元に伝わる由緒によれば、安永３年（1774）に大旱魃に見舞われたため、大きな笠松の下で十数日雨乞いをしたところ、旧暦７月26日に雨が降ったという。その雨を神に感謝して、その地を笠松と呼んで五穀神を祀ったという。昔は雨が降った７月26日に花傘鉾を作って神幸していた。ところが、明治29年（1896）の台風で笠松の大木が倒れてしまい、明治42年（1909）に五穀神社が天疫神社に合祀され、それ以来、天疫神社境内の五穀神社では、神幸行事が４月26日になり、笠松まで神幸するようになったという。

天疫神社を出立した神幸行列は下吉志の海岸を経て吉志区を通って１㎞ほど離れた笠松の御旅所に向かう。笠松には蓋松碑という石碑があり、その前で神事を行い、天疫神社に還御する。花傘鉾は現在２基が随行するが、最盛期には６基出ていたという。

花傘鉾は雨乞いの時に法印から教えられたと伝えられている。花傘鉾は全高約2.5ｍ、花傘の直径は約２ｍあり、小さなリアカーに載せている。上部に木札を立てて御幣を交差させ、60本の造花を傘型に放射状に広げる。造花は竹ヒゴに赤、白、紺の造花をつけたものである。現在、２基の花傘鉾が出る。

（３）宮処野神社神保会の傘鉾

竹田市久住町仏原に鎮座する宮処野神社では10月第２土曜日に大祭（神保会）を行う。本来、初日の10月15日に宮処野神社（元宮）から神輿３基が、御下りといって、約１㎞離れた久住町石田の天満神社（下宮）まで神幸し、翌16日に還幸していた。現在は祭礼が１日になったため、午前中に御下りがあり、夕方元宮にお上りをしている。神保会で神幸のお供をするのは、久住町の仏原獅子組、直入町の原・下河原獅子組、直入町桑畑獅子組の３組の獅子組による獅子２頭ずつの獅子舞と、久住町の有氏白熊組と直入町筒井・長野・新田の白熊（はぐま）組２組による白熊（毛槍）、及び各集落から出る吹き流し旗や花傘等である。

宮処野神社から石田天満社へのお下りの神幸は、午前10時頃から、獅子・白熊・神輿その他の仕役の人々が、神社の広庭で神主から御祓いを受けて身体を清めることから始まる。御祓いが終わると、神社拝殿で宮処野俚楽部による神楽が演じられ、獅子３組が「元宮御立の舞」と白熊２組が「白熊」を順に奉納して、11時に約１㎞離れた石田天満社に向けて出発する。

神幸行列は、３組の獅子組が輪番で先払いを勤め、獅子組の次に２組の白熊組が、これも輪番で前後を決めて続く。神輿の先導は宮処野俚楽部員の演ずる猿田彦が勤める。その後ろを少年が持つ大幣が進み、白い長型の高張提灯「御神灯」と赤い丸型の高張り提灯「日の丸」がそれぞれ２挺ずつ並び、その後に花傘３基が続く。

花傘は石田と中集落が合同で１基、柚柑子・日向・末原集落で１基、それに市・小竹集落で１基出す。花傘は全高約3.6ｍで、傘までの高さが約2.8ｍ、直径１ｍほどの和傘の柄を竹竿に挿している。傘周縁部に幅30㎝の赤い木綿布を幕として巡らす。竹ヒゴに紙製の花や葉をつけた造花を傘上の短い竹筒に挿して立て、その竹筒の下部に20本の竹ヒゴを挿す。その竹ヒゴは傘の外に飛び出して垂れるが、傘上の造花と同様に、周囲を薄桃色に染めた五弁の造花と緑色の葉を糊付けしてある。傘を広げると直径は3.2ｍほどになる。集落名等を書いた六角柱型の行灯を傘下の竹竿に付けている。最後に神輿（久住町市・石田・直入町柚柑子の各集落が神輿担ぎを担当）３基が続く。柚柑子の神輿を先頭に、市と石田の神輿は輪番でその後を行く。

天満社に着くと、参道入口の鳥居前で獅子は「鳥居舞」、白熊は「鳥居越し」を演じて参道に入って境内に進む。そして、拝殿前の広庭でそれぞれ「御着の舞」や白熊を練る。それが終わると、広庭の両側に分かれて神輿のお着きを待つ。三基の神輿を御仮屋に納め終ると、獅子３組と白熊２組が「下宮納め」の獅子舞と白熊をそれぞれ奉納して、お下りの祭りは終る。

お上りは当日の午後３時から始まる。まず神主による仕役のお抜いがあり、それから獅子三組の下宮お立ちの舞があり、順次、元宮に向けて出発する。続いて白熊二組がそれぞれ下宮お立ちの白熊を練る。白熊二組が練り終わると猿田彦の元宮お立ちの舞いがあり、御輿の出発となる。還幸の時は、獅子・白熊の順に下宮参道入口で獅子の鳥居舞い・白熊の鳥居越しが行われて道半に出る。続いて約300ｍ離れた三本杉の宮処野神社二の鳥居で、同じ様に鳥居舞い・鳥居越しを行う。一の鳥居は下宮の東方約一キロの県道脇にあるため、祭の行列はこの鳥居はくぐらない。二の鳥居をくぐった獅子は太鼓や鉦を叩いてにぎわしながら元宮に向かう。白熊も道中歌を唄いながら道中をする。

宮処野神社下に着くと、三の鳥で鳥居舞いや鳥居越しをして、参道で舞いながら進むので時間を要する。神門では獅子と白熊は鳥居をくぐる時と同様の獅子舞と白熊練りを行っい、拝殿前から右廻りで宮廻りを始める。宮廻りでは、先頭の獅子は社務所前で獅子舞をしながら、後続の獅子と白熊が神門をくぐって拝殿前から宮廻りに移るのを待つ。最後の白熊が宮廻りに移ると、先頭の獅子は２回目の宮廻りを始め、各組が３回宮廻りをする。参拝客は獅子・白熊がよく舞う社

P09 宮処野神社神保会で神輿の前を進む傘鉾

P10 宮処野神社神保会の傘鉾

務周辺に多く集っている。こうして白熊の後組が３回目の宮廻りを終えると、猿田彦に先導された神輿三輿が拝殿に到着し、花傘もここまで随行する。獅子と白熊の納めの舞が始まる。古くは獅子三組は別々に納めを舞っていたが、近年は同じ御嶽流であるため、３組の獅子６頭が横一列に並び、ひとつの笛・太鼓に合わせて納めの舞いを奉納する。

（４）丸山神社の秋祭り

大分市野津原地区今市の丸山神社では、９月14日と15日に秋祭りが行われる。今市の町筋の直ぐ下に下宮（御旅所）があり、神輿の渡御がある。今市の町区（45戸）･摺区（20戸）･白家区（15戸）の３区の祭りで、町区は太鼓山（最近は出ていない）とチキリン山を出し、摺区は神輿舁きし、白家区は神楽の担当で、丸山俚楽社が神楽を奉納する。太鼓山はここ10年ほど出していない。チキリン山は花飾りをした舁山で、子供が中を歩いて太鼓を叩き、大人が山を担いで、笛を吹く。この渡御行列に花傘が出る。和傘の笠骨に48本の竹ひごをつけて、紙飾りを装着したもので、傘の周囲に一尺幅の赤い布を下げ、一人で捧げ持つ。かつては４～５本出たというが、現在は２本だけだという。

（５）大矢野上八幡宮の傘鉾

熊本県天草郡大矢野町上地区の上（かみ）八幡宮では、毎年10月第２土･日曜日に秋季大祭が催される。前日の第２金曜日に大祭の準備が行われる。神社を清掃し、拝殿に神輿を遷して神幸のために綺麗に飾り付けをして、江樋戸（えびと）地区のお仮所（御旅所）の準備をする。土曜日には神輿に神霊を遷す神事を行い、まず、子供神楽を奉納する。昼の12時40分に「お下り」の神幸行列は神社を出立して、約２㎞離れた江樋戸地区の御旅所に向かって渡御する。神幸行列の先頭は17基の傘鉾で、上八幡神社の氏子17集落が１基ずつ出している。神幸行列の順序は、傘鉾の次が二人立ちの獅子で、毛槍７人、槍５人、太鼓３人（担ぎ手２人・たたき手１人）、横笛６人、挟箱６組12人、新田集落による小挟箱６組12人、賽銭箱２人、神名幟１人、真榊串２人、四神旗（鉾）４人、弓矢１人、飾旗２人、長刀１人、天狗面１人、傘袋３人、槍２人、金幣２人、神輿１基（馬場青年団が舁き手）、横笛３人、太鼓３人である。行列の先頭である傘鉾がお旅所に到着するの

P11 大矢野上八幡宮の傘鉾の列

P12 地面に立てられた傘鉾

は午後３時20分頃となる。途中で行列に参加した子供神輿３基（谷、江樋戸、中の丸の各子供会）３時40分頃に到着し、獅子舞、太鼓、毛槍などが次々に到着し、午後４時過ぎに神輿がお仮所に着御する。毛槍や挟箱の一行は所作をしながらお仮所を時計回りに廻る。傘鉾は翌日のお上りまで、自町内に持ち帰ったり、お仮屋から遠い地区では近くの家に預けたりする。最後に獅子舞が演じられて餅撒きがあり、上八幡宮秋季大祭のお下りは終わる。次の日のお上りでは、これと同様な行列が行われるという

17基の傘鉾は真竹の太い柄に８本の太い木製の傘骨で構成された捧持型の頑丈な傘鉾で、手作りである。東江樋戸地区の「恵比須」の笠鉾を例とすると、全高約238cm、人形を除く傘高150cm、傘直径124cmである。傘骨は角棒８本で構成され、傘周縁部も角棒で八角形に縁どり、傘は真っ平らである。傘布は白、幕は幅74cmの赤い木綿布で、傘周縁部の枠木に押しピンで留めていた。傘の上部には四角い箱状の枡台を載せ、その上に人形を立てる。枡台の正面には「奉納」、側面に地区名と人形の人物名を墨書する。人形は源義経などの武将や小野道風のような歴史上の人物、恵比寿・大黒などの福神である。この傘鉾は随行の順が決まっており、必ず傘鉾の先頭を行くのは中の丸地区の傘鉾で、次に傘鉾の順番と人形について記す。

１番は中の丸地区の「大石良雄」、２番は賤の女地区の「豊臣秀吉」、３番は野釜南地区の「加藤清正」、４番は西江樋戸地区の「児嶋高徳」、５番は古野地区の「菊池武光」、６番は豊後谷地区の「楠木正成」、７番は鳩ケ釜地区の「新田義貞」、８番は谷地区の「（仁田）忠常」、９番は馬場地区の「大矢野十郎」、10番は田端地区の「源義経」、11番は野釜地区の「梶原景時」、12番は女鹿串地区の「源為義」、13番は串地区の「平景清」、14番は新田地区の「日本武尊」、15番は七ツ割地区の「小野道風」、16番は大手原地区の「大黒」、17番は東江樋戸の「恵比寿」である。

上八幡宮の神幸行列にいつ頃から傘鉾人形が神幸行列に随行するようになったのか明らかではない。新田地区「日本武尊」は枡台に「平成六年九月吉日」と書かれているし、串地区「平景清」の枡台にも「昭和五十九年拾月吉日」と傘鉾を新調した日付がわかるものもある。人形によっては、その時期を推測することができる。南朝方の忠臣たちである楠木正成、新田義貞、児嶋高徳、菊池武光などがあり、これは近代以降に作られたものだろう。また、傘の軸に肩にかける横棒がついており、長崎くんちの影響を受けているのではないかと推測できる。上八幡宮の傘鉾は町標としての性格を持つといって良いだろう。

（６）御崎祭りのお傘

鹿児島県南大隅町の佐多岬に鎮座する御崎神社では、２月19日から20日にかけて御崎祭りを執り行う。御崎神社の妹神が約20㎞離れた郡の近津宮神社の姉神に新年の挨拶をするという祭である。一日目は「浜下り」といい、御崎神社を出立した神幸行列は、田尻、大泊、外之浦、間泊、竹之浦、古里などの御旅所を巡幸し、郡小学校脇の仮宮に到着して、そこで１泊する。２日目には御崎神社の神輿は近津宮神社に行き、姉神と対面する神事が行われる。その後、打植え祭りと神舞（刀舞）が催される。この日は仮宿周辺に二十日市が立ち、苗や農具などの露店が出る。３日目には下岳で法螺貝を吹きならして神事を行い、妹神の御神明は空を飛んで御崎神社に還御するという（１）。

この御崎祭りの浜下りの神幸行列において、神輿の前を先祓いとしてオホコ（御鉾）１基が先導する。また、神輿の後ろをオカサ（御傘）１基が随行する。御旅所などでの神事の時、御鉾と御傘は地を這うように下げて邪気を祓う。この御鉾と御傘は、鹿児島市のおぎおんさぁ（祇園祭）で用いられる鉾と傘と同形である。

（７）大宰府天満宮神幸式大祭（どんかん祭り）のおひれ傘

福岡県太宰府市の太宰府天満宮では秋分の日を中心に前後２日間ずつ、合わせて５日間かけて神幸式大祭を執行している。菅原道真が太宰府流謫の時に暮らした旧宅跡の「榎社」まで神幸するという太宰府天満宮最大の神事で、康和３年（1101）に大宰権帥であった大江匡房の夢想によって始められた伝えている。

榎社は菅原道真が太宰府に左遷された昌泰４年（901）春から逝去した延喜３年（903）２月25日まで謫居した館跡である。主祭神はこの地で道真の世話をした浄妙尼で、行在所（御旅所）となる社殿の背後に石祠が祀られている。

秋分の日の前々日の午後３時、太宰府天満宮の本殿で神幸式大祭始祭が行われる。２日目の午後７時、本殿で出御祭が執行され、菅原道真の神霊を載せた神輿が太鼓と鐘の音に導かれるように出立し、お下りの儀といって約500名にも達する行列が２㎞離れた榎社に向かって厳かに進み、夜10時頃に榎社の行宮に到着する。まずは浄妙尼社奉幣の儀を行い、行宮献饌祭を執行する。そして菅原道真の神霊は行宮で一泊する。

３日目の秋分の日の午後２時から行宮内で倭舞奉納の奉納がある。倭舞は倭神楽とも呼ばれ、４名の御巫女（みかんこ）（小学校５、６年生の女子）が榊舞と鈴舞を舞う。この舞を伝え少女たちに伝授するのは、平安末期に都より太宰府に下ってきて天満宮に巫女として仕えてきた惣市家（そうのいちけ）の女性である。午後３時には御発輿となり、神輿を中心とした行列が榎社を出立する。このお上りの儀の途中、午後４時頃には稚児行列も参列して花車も加わり、行列は大きくふくれあがる。天満宮境内に到着した一行は、一旦浮殿に赴き、５時半から浮殿献饌祭を催し、御供上げの竹の曲（たけのはやし）を奉納する。天満宮の門前で商売を営んできた六座と呼ばれる人たちが竹の曲の演奏を務める。六座は米屋座、鋳物屋座、鍛冶屋座、小間物屋座、魚屋座、染物屋座の六座の代表で、現在でも天満宮の氏子として地元で商売をしているという。六座の人たちによる笛や謡の音色に合わせ、狩衣に大口袴を着用し、侍烏帽子を被った小学校５、６年生の男子が舞を披露する。午後６時半頃に還御の儀といって本殿に神輿が到着し、神霊を本殿に遷座する。午後７時頃に本殿還御祭を執行する。

４日目は午後７時から本殿で古式献饌祭を催す。

最後の５日目は、午前11時から本殿で例祭を執行し、午後８時から太鼓橋と心字池周辺に立

てられた蝋燭に火を点す千灯明の献灯がある。心字池に設けられた舞台で水上神楽の奉納が行われて、太宰府天満宮神幸式大祭は終了する。

平成27年（2015）の『23日「お上がり」神幸列附』という行列の配置図によれば、御神輿の傍らに『(若手祭典部）スゲサシハ　カネノサシハ　キンガイ（傘)』と書かれていた。

スゲサシハは菅翳のことで、全高は約270㎝ある。翳本体は直径約60㎝あり、円形に編んだ菅の周囲には金色の金属の縁をつけ、その中心に金色の梅紋をつける。柄は黒漆塗りの木製である。菅翳は４本あり、神輿の前後左右を進む。

カネノサシハは金翳と表記できるが、金色の翳と銀色の翳がそれぞれ１本ずつある。全高は約300㎝で、翳本体は直径約75㎝。翳本体の周囲には金色の金属の縁をつけ、柄は黒漆塗りの木製で、菅翳より大型である。金色の翳は、翳本体裏表を金地して両面に龍を描く。銀色の翳は翳本体の裏表を銀地にして鳳凰を描く。神輿の進行方向左横に金色の翳、右横に銀色の翳を立てる。

キンガイは錦蓋と表記できるが、傘布は錦ではなく、赤い布なので、一種の絹傘（蓋）であるといえる。傘に被せた布と幕は縫い合わせて一体化しており、幕には梅紋を２カ所染め抜いている。柄は樫製の棒である。榎社を出立した神輿はがっしりとした木製の台車に載せられて巡行する。その台車後部の金具に錦蓋の柄を挿して立てる。錦蓋は全高約300㎝、傘直径約150㎝。幕部分の丈は約30㎝である。

太宰府天満宮所蔵の『太宰府天満宮神幸図（嘉永本)』は、平戸樹光院寺円心が藩主松浦肥前守の命受け、嘉永５年（1852）に描かれた絵巻物「西都安楽寺天満宮例祭神幸之図」を書写したもので、嘉永５年は菅公没後950年に当たる年であった。『太宰府天満宮神幸図』の嘉永本では、神輿を描いた本紙上部に紙を貼り足し、赤い傘の上部を描いて「神輿　御日□傘　金指羽二本菅指羽五本」という注記を施している。　『描かれた祭礼』（１）の資料解説によれば、神輿に差し掛けられた傘を「おひれ傘」と呼んでいたという。また、太宰府天満宮所蔵の『太宰府天満宮神幸図（元治本)』は元治５年（1864）に描かれたものである。現在と違って神輿は輿丁たちによって担がれているので、神輿の後ろを赤い「おひれ傘」を捧げ持つ人が付き従っている姿を描いている。このおひれ傘、それに菅翳と金翳は、神輿に載せられた祭神の宗教的権威を示す標識としての性格が強いと思われる。

太宰府天満宮神幸式のおひれ傘と翳

（８）筥崎宮ほうじょうや（御放生会）の大傘

福岡県福岡市東区に鎮座する筥崎宮では、毎年９月12日から18日まで放生会（ほうじょうや）を開催する。延喜19年（919）に筥崎で放生会があったという。元中６年（1389)、九州探題今川貞世が筥崎宮大宮司五智輪院に宛てた文書に「放生会不可怠」という記述がある。慶長年間（1596～1615）に途絶えた後、延宝３年（1675）に再興し、毎月15日に法会として行っていたが、明治時代の神仏分離によって法会から神事へと変化した。

現在、筥崎宮の御神幸は、隔年（西暦奇数年）で行われ、放生会期間中の９９月12日から14日にかけて執行されている。博多夷町の頓宮まで、博多湾を渡る海上渡御の御神幸であったが、天正年中（1573～91）の戦乱による頓宮炎上と共に廃絶した。元禄14年（1701)、神職らの願いに

よって、当時の福岡藩藩主黒田綱政が寄進を行い、海岸部の神域内の松林に仮宮を設けて頓宮を設け、本宮と頓宮の間を往復することで御神幸は再開された。

行事は９月１日の注連卸しと神輿潔めに始まる。ここでは神幸の時の行事日程を記す。

12日午前３時から初日祭を催され、神輿への神霊遷しは浄闇の中で行なわれる。菓子を　供える献菓祭、本宮夕御饌祭が執行される。午後６時、お下りの神幸行列は本宮を発御する。神輿三基は高張提灯・鐘・太鼓・清道旗・八ッ旗に先導され、獅子・幣帛・大小榊・太刀・弓矢・随身・駒形等の供奉を従え、伶人の奏楽の中を約４時間にわたって、氏子地域の馬出・千代・妙見・吉塚駅前・箱崎の各地区を巡幸し、箱崎浜頓宮に遷御して頓宮に留まる。

神幸には応神天皇・神功皇后・玉依姫命の各神霊を載せた神輿が３基出る。神輿は、後ろから大傘を差し掛けられながら巡幸する。大傘の柄を竹竿に挿しているため、傘の高さは４ｍを超える。傘の傘布と幕は赤い布を縫い合わして一体としており、幕は６枚に分かれて、風が吹くたびに大きくたなびく。この大傘は祭神の宗教的権威を示す威示具であると考えられる。

13日には頓宮朝御饌祭と頓宮夕御饌祭、それに献茶式が行われる。

14日も頓宮朝御饌祭と頓宮夕御饌祭が行われる。午後７時にお上りの神幸行列は頓宮を出発し、箱崎地区を約１時間かけてお下りと逆の経路で練り歩いて本宮に戻る。巡幸路に面した家々は門提灯を灯し、氏子が表に出て神輿を拝み、子供が奉持する賽銭箱に賽銭を投げ入れる。最後は勇壮な「走り込み」で神幸行事は幕を閉じ、神輿に載せられた神霊は本宮神殿に還御する。

15日は放生会大祭が執行され、献華祭が行われる。そして、16日には五日祭、17日には六日祭、18日には納祭が行われ、その終了後に放生神事を開催する。稚児行列・童児育成祈願祭の後、稚魚と鳩を放つ放生神事を行い、筥崎宮御放生会は終了する。

筥崎宮の御放生会における神幸行列で、神輿に差し掛けられる大傘は、祭神の宗教的権威を示す標識である。

【注記】

（１）『描かれた祭礼』国立歴史民俗博物館・1994。

【参考資料】

『なかつ傘鉾』中津地方文化研究所・2009。
『八代妙見祭ユネスコ無形文化遺産登録記念 大笠鉾展』八代市立博物館未来の森ミュージアム・2018。
『大分県の祭礼行事』（大分県祭礼行事調査報告書）大分県立宇佐風土記歴史民俗資料館・1995。
加藤健司「佐多の御崎祭り」『祭礼行事・鹿児島県』おうふう・1998。